

異世界でうさぎになって、
狼獣人に食べられました



榎本ペンネ

Penne
Enomoto

Characters



ローヴェルト

ベックラーの家の執事。羊獣人。



アレックス

ベックラーのきょうだい。思わぬ形でルミの前に現れるが……？



ハロン

ベックラーの副官を務める。チーター獣人。



エスさん

自称・超自然的存在。ルミの転生をサポートする。

アレンカ

軍に所属する研究者。オウム獣人。ある事情から、つがい研究に強い関心を持つ。



ルミ

黒うさぎの姿。



ベックラー

ルミが異世界ではじめて出会った相手。狼獣人で、誇り高い貴族軍人。

ルミ

うさぎ獣人として異世界転生した元日本人。転生前はどこか生きづらさを感じていた。

目次

異世界でうさぎになって、
狼獣人に食べられました

書き下ろし番外編

狼とうさぎは相変わらずです

異世界でうさぎになって、
狼獣人に食べられました

プロローグ 異世界へ帰ることになりました

目が覚めると、いつの間にか宇宙空間のようなところに放り出されていた。一面の黒を背景に、光の粒が散らばり、一部は天の川のように流れている。

さっきまで私は普通に寝ていたはず。明日は朝一で講義があるから早く寝なきゃと思つて布団に入り、まどろんでいたら次の瞬間にこれだ。混乱する。

「えー、高木瑠海さん。こんにちは」

「……こんにちは」

見渡す限り誰もいなかったはずの空間に、突然青年が現れた。線が細く優しげだが、見かけの年齢のわりに表情と仕草が子どもっぽい印象を受ける。ここは無重力状態なのか、青年と私は向き合いながらもお互い少し違う角度で漂っていて、変な感覚だ。

「どちらさまですか」

「僕は超自然的な存在です。スーパーナチュラルです。神っていうほど偉くも万能でも

ないですし、現在地球上に存在するなんらかの宗派に属するものでもありません。エスとでも呼んでください」

「はあ」

「あれ。いきなり信じてくれます？」

「いえ、あまりに不可思議な状況なので、ひとまず現状を受け止めるところからはじめようかと」

「冷静でありがたいですー」

いや、十分に動揺してるんだけどな、と思いつつ話の続きを聞くことにする。

「今回お喚びしたのはですね、魂が受肉する場所の間違いが発覚したためです。それを今から修正させていただきます」

「間違い？」

「ええ、たまーに、ほんとにたまーにですけど、起きてしまうんですよ。あなたたちの世界で言うところのチェンジリングに近いですかね。わざとではないのですけど」

チェンジリングって、妖精の子どもと人間の子どもが取り替えられてしまうというあれか。

「あなたも、地球ではなにか生きにくさを感じていたのでは？」

「……そうですね」

親にはどことなく変な子だと思われて、ほとんど祖父母に育てられたし、学校でもずっと異質さを感じてきた。そんな心の落ち着かなかった部分について、すくと納得がいった気がする。

でも、これまでの違和感やつらさが、神様のような存在による魂の入れ間違いのせいなのだとしたら、人生はなんと理不尽なのだろう。

その気持ち伝わったのか、青年、エスさんが慌てだした。

「あ、言っておきますけど、僕のせいじゃないですよ。僕は魂に関する諸々の修正担当です。受肉担当は別にいます。あいつら、英雄とか創造する時はめっちゃ凝るくせに、こういうミスをよく……、あつ、違います、たまーに、ほんとにたまーにして、僕らに尻拭いさせるんですよ」

「それ、私に愚痴ることじゃないですよね」

思わず尖った声で言っつて、エスさんを胡乱な目で見やつてしまった。しかも、受肉担当とやらがかなり頻度高くミスしているようなのは、ちよつと許しがたい。

「すつ、すみません！ 高木さんには大変ご迷惑をおかけして……、あのつ、少しサービスさせていただきますから！」

おつと。そんなつもりじゃなかったのに、なんだかクレマーみたいなになってしまった。というか、そんな対応でいいのか、自称・超自然的存在。

彼は汗を拭うジェスチャーをしながら話を続けた。

「えーとですね、高木さんは、本来別の世界で獣人として生を受けるはずだったので、間違つて地球で人間になってしまいました。そして、別の世界の別の種族であることに魂が限界を迎え、肉体と乖離してしまつたのです」

「獣人……、ファンタジーの世界ですね」

「地球の方からするとそうでしょうね」

「それで、私、死んだんですか？」

「はい。地球上では突然死という扱いになります。ご愁傷様です」

「そ……うですか」

これまでの話で想像はついていたが、実際に言葉にされるとそれ以外にも返せなかつた。

口を噤んだ私に対し、エスさんは仕切り直すように姿勢を正す。

「まずですね、この不始末に対する基本的な賠償として、本来受肉するはずだった世界での続きの人生を提供します。身体は獣人のもので、健康に設定してあります。少し若

返らせることも可能ですが、最低でも成人していたほうがなにかと便利ですので、高木さんの場合は現在の二十歳から十七歳か十八歳にするくらいが妥当だと思われます。あ、十六歳が本来の世界での成人年齢です」

「はあ」

自分が死んだという衝撃で頭がいっぱいで、生返事をしてしまおう。

「次に、えー、あの世界の場合ですと……、『生涯のつがいに出会える保証』をお付けします」

「はい?」

上の空ではいられないフレーズを耳にした気がして聞き返すと、エスさんは満面の笑みのドヤ顔をかました。

「『生涯のつがいに出会える保証』です!」

「なんでですかそれは」

「あなたがこれから行く世界の獣人は、つがいを見つけると『この人だ!』とわかるようにできています。しかし、一生のうちにつがいに出会える確率はだいたい1%といったところでしょうか。さらに、晩年に出会って一緒にいられる時間が短いとか、別の人と結婚した後に会って修羅場になるとか、いろいろと問題も起こりますので、幸福に

つがえる確率はもっと低いです」

「はあ」

「そんな中、今回お付けする保証は、なんと! 本来の世界に戻ってすぐにつがいに会えるというものです! しかも、年齢が比較的近く、生殖可能。あなたのサポートができるよう、それなりに生活力もある相手になる予定です。すごいでしょう?」

セールス口調が気になるとか、都合が良すぎではないかとか、いろいろと突っ込みどころがあるが、とりあえずこれだけは言っておかなければならない。

「それって、お互いに無理矢理、恋愛感情が芽生えるってことですか? 好みとか無視ですか? 強制的につがいになって幸せになれるんですか? そもそも、つがうことが最高の幸せって誰が決めたんですか?」

「うっ……、高木さん、手厳しいですね」

おっと、思わずいろいろと言ってしまった。でも聞いておくべきことだと思う。

「えー、まず、無理矢理ではありません。恋に落ちるべくして落ちるといふか。もともと世界のどこかにはつがいとなる可能性のある相手がいるはずなので、今回はその中でもっとも条件に合った相手のところに転移してもらおうという形をとります」

「えっ、つがいって複数いるんですか」

「可能性がある相手は、そうですね。でも、一人目に会ったらもう他には反応しなくなりますし、その潜在的相手にとっても魅力がなくなりますので問題ありません。ごくごく稀に、つがいと死別後に二人目に出会うこともありませんが、奇跡のような確率ですわね」

「へえ」

「ちなみに、つがいは魂の相性が大変良いので、基本的に側にいるだけでQOLが爆上がりです。結婚とか子孫繁栄とか関係なく、ある程度は幸せになれるはずですよ」

「なるほど」

「ご理解いただけでよかったですー！」

エスさんは嬉しそうに目元に涙を溜め、胸の前で祈るようなポーズを取っている。

「今日は残業なしで帰れるかも」と聞こえたのは気のせいだろうか。

「でも、納得はまだできていません。今までの生活をすべて捨てることになるし、もう帰れないわけですよね」

「そこは、はい、申し訳ありません……」

「運命の相手、みたいな人に会えることはありますが、私は獣人ではなく人間なので、本当につがいという感覚に満たされるのか未知数で、不安です」

「それは当然のご懸念^{けねん}で……」

「ていうか、新しい世界でどうやって生きていったらいいのかもわからないし、おじいちゃんおばあちゃんともお別れできなかったし、この気持ちをどうしたら」

目の前にいる相手はミスを犯した当人ではない、八つ当たりだ、とわかっている、ついそんな言葉が口からこぼれ落ちる。

「あああ、それに、パソコンのデータ消さない！ 消してくれませんかね!？」

私はようやく衝撃から回復し、頭が回ってきたのか、いろいろなことを思い出してしまつて、ついエスさんに詰め寄つた。彼は慌てて手を振り回す。

「そつ、それは無理ですうー！ あつ、そうだ！ 追加サービスとして、これから行く世界での、美人の条件をいくつか追加しましょう！ 見た目はさほど変わりませんでご安心を」

「いや、それとこれとは話が別で……」

「じゃ、じゃあ、さらに大サービスで、つがいの身体の相性も最高にしちゃいましょう！ これより確実に相手をノックアウトです！」

「はいいい!？」

エスさんは焦つたように話を締めにかかる。

「いやあ、いい仕事しました！ これで万事オーケー、とつても安心です。これから新しい、いえ、本来の世界にお送りしますが、頑張つて幸せになつてくださいね！」
 「ちよ、ちよと待つてください、聞きたいことがまた増え……」
 「では転送しまーす！」

私の意識はここで途切れた。最後に、「困ったことがあったら、社やしろで真剣に祈つてみてください。暇な時なら対応しまーす」と聞こえた気がする。

そして次に目が覚めたら、草むらでした。

第一章 うさぎ生がはじまりました

草と土の香りが鼻先をくすぐる。目を開けると、周囲に背の高い草が生えていて、先が見通せない。ひとまず起き上がったが、それでも草は私の目線よりも随分高いし、なんだか周りがぼやけて見える。それに奇妙に地面が近くないだろうか。ほら、こうしてすぐ地面に顔が……

(ぎゃーっ!!)

叫んだつもりが、声が出なかった。代わりに、すごい勢いで身体が勝手にジャンプした。正直、自分の目線の倍以上飛んだんじゃないかと思う。

(なにこれ、なにこれ、おっきなアリがいる！)

いや、待て。さすがになにかがおかしい。低い目線、大きなアリ、並外れたジャンプ力……

じっと手を見る。

うん、動物の前脚でした。身体を捻ひねって胴体に目をやると、つやつやの黒い毛並みと、前脚に比べて大きな後ろ脚、そして尻尾が見えた。これ、たぶんうさぎだね。私、黒うさぎになつてるね。

(うさぎー!!)

またしても声は出なかった。うさぎだから仕方ない。うん、仕方ない。全部納得。私の身体が小さいからアリが大きく見えてるだけだし、若干視界がぼやけてるのも、うさぎの視力が低いからだね。その分、ものすごく視野が広い。

……って、私は獣人じゃなかったのか。これではまんま獣けものだ。

ただ、種族がうさぎということについては納得した。私はうさぎが大好きで、もふも

ふしたうさぎの集団の中に入って一緒にひっついて眠りたいとも思っていた。肉より野菜のほうが好きだし、肉食動物のことはちよつと怖い。食べられてしまいそうな気がするのだ。

そしてなにより、うさぎの表情がわかりにくいところに共感する。私は昔から、心の中は大騒ぎでも、それが顔に出ないのだ。考えていることはしつかり口に出すから、無表情で淡々としゃべる変な奴と言われたこともあったけれど。

そんな諸々から、本当は獣人だったと言われて腑に落ちた面はあつたし、きつと自分は草食動物の獣人だろうと思っていた。当たりだった。

(でもこれはないわー)

異世界の草原で、獣として生きる知識も経験もない草食動物がぼつり一匹。

死ぬ。簡単に死んでしまう。

それとも、どうにか頑張ると人型になれるのだろうか。

ひとまず身体を動かしてみると、驚くほどすんなりと思う通りの動作ができる。記憶にあるうさぎの仕草は全部できた。そして、お腹を覗いて気づいた。私メスだ。なんとなくよかった。いきなりうさぎになって、しかもオスだったら、いろいろ持て余す気がする。

それにしても、自分の肛門をまじまじと見る機会なんてはじめてだ。うさぎ、柔軟。

そんなことを考えながら、つついっし耳や顔をくしくしと毛づくろいしては前脚をペロペロしてしまふ。

(はっ！ うさぎっばいぞ、私！)

この調子ならば、うさぎとしてしばらくやっていけるかもしれない。

でも、まずは周辺確認が必要だ。探索には勇氣がいるが、危険の有無を確認しないとイケない。水場も探したい。うさぎは野菜や果物なんかを食べていればさほど水はいらないと聞いたことがあるし、周りには瑞々しい植物が生い茂っているけれど、人間の記憶を持つ私としては、やはり水は必須のように思える。

私の長く伸びた耳や、きゅつとY字になっているのはずの鼻はちゃんと利くだろうか。安全な水や食べ物、敵の接近なんかがわかるだろうか。

不安に思いながらも恐る恐る歩きますと、意外にもすぐに大きな布の袋に行き当たった。

(おお、これは明らかに人間の持ちもの！)

一瞬喜んでその周りを駆け回ってしまったが、はたと気づく。

(この世界……、人間にとつてうさぎはいい食料なのでは……)

嫌だ。人間であれ獣人であれ、捕まるのは怖すぎる。獣も怖い。知性ある生き物も怖い。

でも、少なくとも今、人の気配は感じないので、とりあえず袋に首を突っ込んでみる。(お、携帯食料っぽい……、ショートブレッドみたいなのと、干し肉? あとは着替えに、こっちは金貨と銀貨か。ナイフもある)

「ごそごそ探っていると、ぺらりと紙が出てきた。日本語で文章が書かれている。」

『異世界初心者セットです。活用してください』
 (エ、エスさんめー! これ、人型用でしょ! 私には使えないでしょ! 肉も食べられないし!)

一瞬憤^{いらいら}ってふと気づく。

やはり私は獣ではなく、人型の獣人になるはずだったのではないだろうか。人型向けの親切設計だとすれば、水場なんかも近くに……。少し進むと、予想通り綺麗な小川があった。ほどよく大きな木もあって、果実が実っている。雨宿りもできて食べ物も採れる。至れり尽くせりである。

(人型ならね!)

これはもう、間違って獣型になったとしか思えない。そして、人型にとっては安全な

場所に降ろしてくれたのかもしれないけれど、小型草食動物にとって安全かは不明。用意してもらった初心者セットも使えない。どうやったら人型になれるのかもわからない。社がどこにあるのかも知らない。

(ほんとにもう……、どうしよう)

この状態では、つがい(予定)と出会ってもお互いにわからないだろう。というか、どうやったらわかるのかも聞いてない。ついでに、つがい(予定)が好みかどうか聞きそびれた。

(詰んだ。私のうさぎ生、終わった。短い異世界生活でした……)

なんだか妙に諦めの境地になって、ころりと地面に横たわる。とりあえずは水で喉を潤^{うるお}すこともできたし、緊張しまくって疲れたのだ。うさぎの身体は小さく繊細で、疲れやすい。

陽光も暖かく、私は川辺でうとうとしはじめてしまった。



今回は苦労ばかり多く得るものの少ない、嫌な仕事だった。近頃きな臭さが増してい

る隣国に出向いての情報集め。現場に出る仕事が減って、軍本部での情報解析が増えてきていた中、内容としては俺が直接行くほどのものではなかったが、俺の貴族としての肩書が必要だったため仕方がなかった。それに、希少で力ある狼獣人は、どこの国でもなにかと権力者の受けがいい。そういう風習は嫌いだ、仕事上有利になるならばそれを利用するのは当然だ。

とはいえ、おもしろみもなく、ストレスが溜まるばかりの滞在だったから、帰りにこうして少し寄り道をして一人の時間を作った。ついでに魔物でも狩って憂さを晴らそうと思ったのだが、目ぼしい獲物とは遭遇することなく、すんなり危険地帯を抜けてしまった。拍子抜けだ。

眼の前に広がるのは、麗らかな日差しが降り注ぐ平和な草原。こんなところで日がな一日昼寝でもしたいものだが、この平穏を守るためにはいろいろとやらねばならないこともある。それが軍人であり貴族でもある俺の責務で誇りなのだ。

まずは日が暮れるまでに次の街に入り、先行している腹心と合流しなくては。寄り道というわがままを言った分、それなりに働く必要があるだろう。

俺はこの長閑な光景に似つかわしくない重い溜息を吐いて、小川沿いを進んだ。

小川の近くに、誰かの荷物が置かれている。しかし、周りを見回しても人影はどこにもない。血の匂いもしないし、なにかに襲われたとは考えづらい。

どうしたものか、と思ったが、それよりも気にかかることができてしまった。人や血の匂いを嗅ぎ分けようと集中したら、とても芳しい香りがあたりに漂っていたのだ。

(なんだこの香りは)

居ても立ってもいられないような、それなのに落ち着くような、不思議な香り。もっと嗅いでいたくなり、さらに鼻に意識を集中させた。どうやら荷物のあたりから漂ってくるらしい。

(荷物の持ち主の香りか?)

いつになく胸を高鳴らせながら、荷物に近づいていく。確かに香りは濃くなったが、発生源はさらにその先の、小川の側にあった。

「うさぎ……」

すやすやと気持ちよさそうに眠る黒いうさぎ。野性をどこにやった、と言いたくなるくらい無防備に転がり腹を晒している。毛艶がよく、光を反射して毛の先がきらきらと輝いていた。足の先と腹だけは毛の色が白く、しかもほとんど汚れていない。

「か、可愛い……」

思わず呟いて、自分にもそんな感性があったのかと驚く。さらに、すぐにも抱き締めてしまいたいという気持ちが心の奥底から湧いてきて、手を変な具合に握ったり開いたりしてしまった。

そして、野良うさぎにしては違和感のあるその小綺麗な様子からふと気づく。

（もしかして、うさぎ獣人なのか？）

それならなぜ獣型でこんなところにいるのだろうか。普通の獣人、とりわけ小型の草食動物が獣型で外をうろつくことなど考えられない。そもそも裸であるわけだし、人と獣を問わず襲われやすく、危険極まりないからだ。いくら平和な草原とはいえ、こんな小さなうさぎの姿でいるなんて不用心すぎる。

それにしても、近づくほどに増すいい香りはなんなのだ。成人した獣人ならば誰もが持つフェロモンの匂いもするようだが、発情した時の強い匂いとは違うようだし、そもそもそれでは説明できないほどの魅力を感じる。思わずふらふらと黒うさぎの横に膝をつき、顔を近づけた。

と、その瞬間、黒うさぎが目を覚まし、身を起こすと変な方向にジャンプした。着地したあとは、俺の視線に縫い留められたようにそのまま固まる。わずかに震えながらも身動きが取れずにいるその様に、肉食獣の獣人らしく嗜虐心シキョウシンをくすぐられながらも、

大事に大事に傷つけないようにしまい込みたい気持ちにもなる。

「怖がらせてしまったか」

はじめての感覚に対する動揺を押し殺して、落ち着かせるようにゆっくり言っても、黒うさぎの硬直は解けなかった。

「君は、うさぎ獣人だな？」

それでも動かない。言葉が理解できないのだろうか。

（うさぎは表情がわかりにくくて困る。俺は早く仲良くなって、その柔らかさそうな毛に顔を埋めて胸いっぱい匂いを嗅ぎたいのだが……。いや、なにを考えているんだ、俺！）
ともかく、絶対にこのうさぎを逃してはいけないということだけはわかっていた。そんなことになったら、俺は絶対に後悔する。もし逃げられたら、即座に自分も獣型になって追いかけよう。

その決意が伝わってしまったのか、黒うさぎの震えがひどくなって、ついには腰が抜けてしまったようだ。腰からへたりこんで立ち上がれなくなっている。

「すまない。怖がらせるつもりはなかったんだ。話がしたいから人型になってくれないか。服を着るまで背を向けているから」

そう言うと、うさぎから途方に暮れたような気配が伝わってきた。少なくとも言葉は

通じているように思う。だが、人型になる気はないらしい。まあ、突然現れた獣っぽい男を信じられないのは当然だ。とはいえ、うさぎでいるほうがずっと無防備に思えるが。それにそのまま獣型でいるならば、荷物をどうするつもりなのだろうか。このままでは街に着く前に日が暮れてしまう。

不審者ならば捕縛する必要がある。一瞬、俺に差し向けられた隣国のスパイあるいは暗殺者なのは、という考えが頭を過ったが、ありえないと考え直す。獣型でこんなところにいるのはデメリットが大きすぎるし、俺の今回の寄り道は唐突に決めた上、ルートは直感で選んでいるから先回りは不可能だ。

(ならば訳ありの迷子か？ ふむ。迷子を保護するのも軍人の職務のうちだ)

そう自分に言い聞かせると、うさぎに言った。

「この荷物は君のものか？」

ようやくうさぎは頷いた。

「俺と一緒に街まで行こう。どうだ？」

少し迷ったようだったが、うさぎはもう一度頷いた。

ゆっくりと、脅かさないうちに手を伸ばす。うさぎは一瞬身を固めたが、頭を撫でると気持ちよさそうに力を緩めた。その隙に身体ごと持ち上げて、胸に寄りかかせて片

腕で支える。

手触りは恐ろしく柔らかく、小動物らしい体温の高さと鼓動の速さが伝わってくる。ついでに気づかれないよう少しだけ鼻を近づけて匂いを嗅ぐと、やはり極上の香りがあった。

そしてなぜか、下半身に血が集まってくる。

(これは危険だ……)

慌てて鼻を離すと、置いてあった荷物を拾い上げて歩きだした。すると、いかんともしがたく抱えたうさぎの香りが上がってくる。宿に着くまでずっと、こんな至近距離でこの香りに悩まされるのは困る、と気づいた時にはうさぎは俺の腕の中ですやすやと眠っていて、俺は士官学校で叩き込まれた軍人の心得をひたすら頭の中で唱えながら黙々と早歩きをするしかなかった。

街に入る少し前に、うさぎが目を覚ました。もそもそと動いて、俺の肩越しに周りを見ようとする。

「目が覚めたか。悪いがしばらくこの中でじっとしていてくれ」

うさぎを抱えて歩く姿は、正直怪しい。仕方なく、荷物からマントを取り出してうさ

ぎを包むことにした。不思議そうに首を傾げながらも、大人しく俺のマントに包まれるうさぎはとても小さく、守ってやらねばという気持ちで湧き起こる。うさぎはしばらくもぞもぞと動いていたが、落ち着く姿勢を見つけたやうで動かなくなった。

街の中、人の密度が高くなると、すぐ側を通る若い男どもが鼻をひくつかせてなにかを探す素振りを見せるようになった。

(俺だけではなかったか。やはりこの匂いは目立つ)

呼吸のために開けている隙間から、うさぎの芳しい香りが漏れてしまいうらしい。

(ただのフェロモンではないと思ったのだが、やはりフェロモンなのか?)

ともかく落ち着いて話せるところで二人きりになりたかった。

「いらっしやいませ、ベックラー・ケルンハルト様。ご宿泊のご予約をハロン・シユパール様より承っております」

この街に来る時は必ず使う宿に入ると、すぐに支配人がやってきた。腹心が手配しておいてくれた部屋に、そそくさと向かう。さすが高級宿の支配人、俺が抱えている不審なものにも、匂いにも、一切反応せずに案内してくれた。

部屋に着いて人の気配が去ると、うさぎをマントから出してベッドの上にとっと下ろした。周囲を見回して、感謝するように頭を下げてくる。

「くっ……、やはりこの香りは……」

マントにこもっていた濃い匂いが解放され、部屋に充滿する。本能を直撃する刺激に、思わずベッドサイドに跪いて悶えてしまった。

うさぎは不思議そうにそれを眺めると、自分の身体がここに鼻を突っ込んで匂いを嗅いで、毛づくろいをしていく。可愛い。可愛くて愛しくて、すぐにでも抱き締めて撫で回したい衝動に駆られる。ついでに、下半身の欲求が堪えようもないくらいに高まって、この香りが充滿する部屋から逃げることにした。

(敵前逃亡……、ではない。これは戦略的撤退だ)

「すまん、風呂に入ってくる」

そう言い残して、早足で部屋の奥のバスルームに向かった。

風呂場で一人、精を吐き出して、反省する。うん、俺は変態だ。ごめんなさい。

いくら奇妙に惹き寄せられる大変好みの香りがするからって、初対面の、しかも獣型しか見たことのない相手に欲情するなんて、どうかしている。

考えてみれば性別すら確かめていない。フェロモンらしき匂いからするときとメスだが……、あまりに靈感的な香りに阻まれて、判別が難しい。

俺は今までそれなりに女性経験を積んできた。十代の頃は誘ってくる年上の女性たちと後腐れなく適度に楽しみ、二十代になってからは高級娼館のプロたちを相手にしてきた。女性というのは、香水や化粧品などがきつくさえなければ、基本的に柔らかくていい匂いをするものだと思っっている。それらは好ましいものだが、最高級の女を抱いても溺れることはなかった。

しかしどうだ。俺の両の手のひらに乗せられる程度の小さなうさぎの匂いに、今、溺れそうになっている。それにあの毛皮の柔らかさといったら……！

（違う違う。女性の柔らかさというのは、そういうことじゃない。こう、たわわな二つの実りがだな……）

ああ、でも、あの柔らかな毛を撫でて、できれば腹なんかもふもふして、匂いを嗅いだら最高じゃないだろうか。このまま逃げないよう檻に入れて飼ってしまいたい。毎日おいしい食べ物を与えて、快適な環境を整えて、夜は押し潰さないよう気をつけるから抱いて寝たい。

（はっ！ こうしているうちに、いなくなっているなんてことは……？）

訳ありだったから、俺を利用したということはないだろうか。街の門には衛兵がいるから、目立つ容姿だと記憶される。それを避けるために運ばれることを選んだとか。い

や、それにしても、あの草原は人を待つのに不適切な場所だったし、下手をすれば誘拐などされるかもしれない。

だが、ないとは言えない。

その可能性に思い至った俺は、身体を流すのもそこそこに、慌てて風呂場を飛び出した。



私を拾ったケモ耳ケモ尻尾の男性は、ベックラーさんと言うらしい。

川辺で目が覚めた瞬間に巨大な人型が覆いかぶさるように自分を見つめていたから、びっくりして心臓が止まるかと思った。しかも少し息が荒くて、食べられてしまうんじゃないかと怖くなった。

でも、ベックラーさんは私がうさぎ獣人だとわかっていたらしく、丁寧に話しかけてくれて、しかも親切にも街まで連れていってくれることになった。それが私にとって安全なのかはわからないけれど、少なくとも草原で夜を越すよりずっとましだろうと思っ

て身を委ねた。

そしてなにより、ベックラーさんは飛び切り格好よくて、私の好みど真ん中だった。ケモ耳が生えてたけど！ ケモ尻尾も生えてたけど！ むしろいい！ ガタイのいいワイルド系男性に、灰色のケモ耳ケモ尻尾。いい……！ 声も腰にくる低音とか、なんだこれ。最高すぎる。

おそらくイヌ科の、肉食獣の獣人なのだろう。威圧感があつて少し怖いけれど、大きな手はあつたかくて気持ちがいいし、なんだかい匂いがして、街に着くまでつい眠つてしまった。

私を宿のベッドに下ろすと、ベックラーさんはすぐにバスルームへ行つてしまった。

(別に汗臭くもなく、いい匂いなんだけどなあ。あ、私が臭かつたせいじゃないといいんだけど)

そんなことを思いながら、広い背中を見送る。

彼が去つてしまうと、急に心許ない気持ちになつた。人間の時より視界がぼやけていくし、ベッドはとも広く感じられる。うさぎであることがこんなにも心細いなんて知らなかった。

それに今、私は見知らぬ世界にいる。その実感が急に湧いてきて、草原にいた時やベックラーさんに触れていた時には隠れていた孤独と不安が溢れ出てきた。

ベックラーさんがお風呂から戻つてくると、私は思わず彼に駆け寄つた。ベックラーさんの側はなぜか落ちていたから。

しかし、ベッドの上は歩さにくく、うっかり縁から落ちそうになつてしまう。

「おい！ 危ないだろう」

ベックラーさんが私を抱き上げて、膝に乗せてくれた。薄いズボンはを穿いただけで、髪が濡れたままのベックラーさんは、まさに水も滴るしたたいい男で大変セクシーだった。お風呂上がりの身体の熱さが私の脚やお腹に伝わってくる。そして、くらくらするほど魅惑的な匂いが漂っていた。

私は突き動かされるように、匂いの強いところに近寄る。

ふんふんとベックラーさんの太腿に鼻を寄せて匂いを嗅ぐと、くすぐったいのかベックラーさんが身じろぎした。「可愛い」と呟いたような気がするけれど、気にしていられない。

「……ごほん。ところで、君は、人型になる気はないのか?」

その問いかけに、ふと意識が戻る。かすかに頬に朱が差しているベックラーさんは、一応真面目な顔をしていた。

(人型になれないってことを、どう伝えたらいいのやら……)

頭を上げて、首を傾げることくらいしかできない。

「なにか事情があるのか」

ベックラーさんは察してくれたようで、そう問いかけてくれた。ありがたい。

極力神妙な様子を作って頷いた。

ベックラーさんは少しの間考ええると、「犯罪ではなさそうだな」と呟いたので、一生懸命何度も首を縦に振った。それで一応は納得してくれたみたいでほっとする。まあ、我ながらだいたいぶ怪しいとは思うんだけど。

「ところで君は、その……、女性、だよな？」

そう問われて、私は後ろ脚で立った状態で固まってしまった。うさぎの性別は見た目ではそんなにはっきりとわからないけれど、私は首のところの肉垂マダラがそこそこあるから、メスだと判別はつきそうだと。それともそういう動物の知識って他種族だとよく知らないのだろうか。

（あれ？ そもそも私は宿の部屋に連れ込まれていると言えるわけで……？ そこで女性かどうかを確認？ これどう捉えたらいいんだろう？）

忙せわしく耳を動かしながら考えていたら、「すまん」と言ったベックラーさんにひょいっと持ち上げられて、後ろ脚の間を覗き込まれてしまった。

（いやあああ！）

「痛っ！」

思わず蹴った。顔にクリーンヒットしたと思う。うさぎの後ろ脚は強いのだ。手が緩んだところで暴れて、華麗にベッドに着地。いきなり股を覗き込んだベックラーさんから距離を置いた。ちよっとした危険人物と認定しましたよ。

「す、すまなかった。どうしても気になってしまったんだ。許してくれ」

真摯しんしに謝られると、それもそうかという気になってくる。なんでかベックラーさんは信用していい気がするのだ。

それに、実はさっきからそれどころではない。お風呂で温まったせいかわベックラーさんの全身から惹きつけられるいい匂いが立ち上のぼっている。さらに、その奥から蠱惑的で誘うような香りもしていて、何度も意識を奪われそうになっている。

この匂いをもっと嗅ぎたい。酔ったように理性が眠りについて、本能に突き動かされるように匂いの源を探った。再びベックラーさんに近づき、太腿に乗り上げる。

匂いの源は、……股間だった。

（なぜ股間からこんないい匂いが！ ああでも嗅いでしまおう！）

匂いを嗅いでいると、頭がぼうつとして、心地よい酩酊めいてい感かんに襲われる。

「お、おい、酔っているのか？」

(そうかもしれません)

そう思いながら、匂いの強いところに顔を擦りつける。

「そっ、そんなところでそんなことをしたら……」

焦ったようなベックラーさんの声を遠くに聞きながら、私はそれをやめられない。

(私はこの匂いをもっと嗅ぎたい！ それになんだかおもしろい感じがする！)

ベックラーさんが私を匂いのもとから引き離そうとするから、その手を思い切り噛んでしまった。「痛い！」という声とともに手が離れた隙に、邪魔な布をどかすべく前脚を一生懸命動かす。

「ちよつと待て、なにをしている！」

はじめはただ揉んでいるような動きになってしまったけれど、途中で爪が引っかかって布が取れた。それと同時に、匂いが広がり強くなる。

やっぱりここだった、と思いつながら鼻先を近づけると、肌色より濃い色のががびくりと動いた。

「なにをしているんだ！ ああ、もう、髭がくすぐりたい！」

ベックラーさんは文句を言いながら、私からソレを隠そうとする。今度はその手の甲

に爪を立てて引つ掻いた。

「痛っ！」

手がどいたところで、今度は思い切ってソレを舐めてみた。

「うあつ！」

ああ、やっぱりおいしい。瑞々しくて爽やかな果物みたいな感じ。ソレはだんだん硬く大きくなつて、一番匂いの強い部分が遠ざかった。仕方なく、ベックラーさんの筋肉質なお腹に前脚を置いて伸び上がり、先端に舌を這わす。さつきより濃い味が広がって、私はうつとりとそれに酔いしれた。

「ちよつ、くっ……！」

小刻みにチロチロと舌を動かすと、ベックラーさんが艶めかしい声を上げたけれど、気にしていられない。ただただ夢中になって、いい匂いでおいしいソレに舌を這わせた。「なんでこんなに気持ちいいんだ……、おかしいだろう？」 いや、俺はやはり変態になつてしまったのか……？」

ベックラーさんがぶつぶつなにかを呟いているけれど、よくわからない。私はただその匂いと味が気に入っただけだ。

「ああっ、もう、知らないからな！」

やけくそ気味な声でそう言うと、ベックラーさんは自分の手を添えてソレを扱しきはじめた。そうするとさらに透明な液体が溢れだして、私は一生懸命舌を動かす。おいしい。「はあっ、はっ、はあっ」

ベックラーさんの荒い息遣いが頭の上から落ちてくる。時折頭を撫でられるのはうっとりするほど気持ちよかった。

「あっ……、う、イクっ」

ベックラーさんが呻うめきながら私をソレから引き離そうとするのに抵抗したら、先端から数度に分けて白濁はくたくが飛び出して、私の身体にパタパタと落ちてきた。なんだかそこからもっと濃い匂いがしてくる。堪らなくなつて顔にかかったものを前脚で拭い取り、ペろりと舐めた。ベックラーさんが止めようとしたけれど、間に合わなかった。

次の瞬間。

私はベックラーさんの脚の間の床に膝をつき、素っ裸の人型になっていた。

ベックラーさんは呆ぼうけたようにこちらを見つめて言った。

「女神か」

「いえ、違います」

咄と嗟さにそう答えたけれど、エスさんはこの状況をどうしろと言うのだろうか。

「ええと、ベックラーさん、ですよね」

人型になってびっくりした反動で、少し酔いから覚めて冷静さを取り戻したけれど、まだ頭が混乱している。ただ、いい匂いにつられて、とんでもないことをしでかしたことだけは理解した。

（だって、ほんとにびっくりするほどいい匂いでおいしかったんだもの……）

こんなタイミングで人型になるなんて、エスさんの悪意を感じる。うさぎの姿でアレをペるペる舐めたとか、そんなでもって今、裸でアレとご対面してるとか、とんだ変態じゃないか。なぜかベックラーさん、また勃たつてるし。

ともかくも、私は酔ってたんだ。あの匂いに酔ってた。というか、正直今も酔っている。さつきよりも断然濃い匂いが部屋に充満しているからだ。

混乱したまま、とりあえずなにか話さなければと思う。

「あの……、はじめまして？」

「あっ、え？ はじめまして」

間抜けな挨拶をしてしまった。

「とりあえずですね……、すみませんでした！」

ひとまず頭を下げるのが日本人。もともと膝をつけていたから、ほぼ土下座である。

「ちよ、君、なんで謝って……。謝るのは俺のほうで」

「いえ、私が……」

「いや俺が悪かった。……これ以上はやめよう。まず、君は誰で、どうしてこんなことを？」

そう言いながら、私にシーツを掛けてくれて、ベックラーさん自身はズボンを穿いた。勃ったままだけど。

(ていうか、ズボン薄いなー。パンツ穿いてないよなー。気になるー)

思わずそちらに目を向けると、ベックラーさんは居心地悪そうに身じろぎした。

「……えっと、私はルミです。タカギ・ルミ。ルミ・タカギかな」

「俺はベックラー・ケルンハルト。軍人だ」

軍人。なるほど、引き締まった身体はそのためか。

「君はどうしてあんなところに？」

(なんて答えよう……)

魂の入れ間違いが原因で異世界から来ました、なんて言っただけのいいものか。怪しさ満点である。答えに窮きまづしていると、ベックラーさんは一つ頷いて言った。

「……なにか事情があるんだな。答えられないならそれでいい」

「いいんですか？」

驚いて問い返すと、困ったように眉を下げた。灰色のケモ耳とケモ尻尾も一緒にへによりと下がる。

「軍人としては、本当はそれではいけない。怪しい人物を捕らえるのも職務のうちだ。

しかし、今は任務中ではないし、それに軍人としての勘が、君は犯罪者ではないと言っている」

根本的には納得していない様子に申し訳なくなるが、一安心だ。

ほっとして気が抜けたら、さつきから治まらないままのアレが気になってしょうがなくなってきた。私はなんだかおかしい。アレは私を酔わせる匂いのもただし、今はアレから出たものが身体中に付いているから、匂いが強すぎてくらくらしてきた。

(あ、このままだと倒れてしまう)



(俺はどうかしている)

怪しいうさぎを拾ったことも、こうして宿まで連れてきたことも、そのあとのこ

の……、どうかくて倒錯的な行為も、冷静になってみれば、普段なら絶対しないことばかりだ。あんなところで怪しいうさぎを見つけたら、スパイや暗殺者の可能性ありとして即座に捕縛しても構わないくらいだし、普通のうさぎ獣人だったとしても、街に着いたらすぐに迷子として警邏けいろうに引き渡していただろう。

さらに事情を強く聞かずに引き下がるとは、変態以前に軍人失格と言える。なのに、それでルミの心を守るのならいいかという気さえしているのだ。

（本当にどうしてしまったんだ、俺は……）

それにしても、先ほどからまったく熱が治まらない。俺は今、欲望を吐き出した直後のもつとも賢者に近き落ち着いた精神状態のはずなのに。ただ彼女の、高すぎない落ち着いた声音こゑで名前を呼ばただけで、再び勃った。

目の前に女神のように美しいルミがいる。白い肌と対照的な艶めく黒髪が肩にかかり、黒いうさぎの耳が揺れている。瞳も黒く輝くようだ。そして先ほどまでうさぎの小さな舌が覗いていた可愛らしい口元は、今は赤い唇となって、妖艶に濡れて光っていた。

細身ながら見事な曲線を描く裸体をシーツで包み、ベッドに腰掛けた俺の脚の間で、床に膝をつけて俺を見上げるルミを見下ろしていると、押し倒したいという衝動があとからあとから湧いてくる。

（なんなんだ、さっきよりも強くなった芳しい香り、その美しい顔立ち、警戒していない様子、赤みを帯びた頬、揺れる頭……、ん？ 揺れている？）

「危ないっ！」

ルミが横に倒れそうになったのを咄嗟に支える。ぐらつく頭に手を添えると、ルミは潤んだ瞳で見上げてきた。

「なんか……、私、熱くて……」

そう言ってシーツを脱ごうとする。

「待って待って」

慌ててシーツを掴むと、ルミが頭から俺の股間に倒れ込んできた。これはまずい。

「んー」

「おい、ちよっ、やめろー！」

ルミは俺のオレに鼻を擦りつけると、ズボンの上から唇を寄せ、甘噛みする。

「ぐはっ」

その刺激と目に映る情景だけで危うく吐精しそうになった。

黒うさぎの姿もぐつときたが、あれは背徳感がありすぎた。片方が獣型というプレイをする者もいるというが、俺はそういうアブノーマルな趣味は断じて受け入れられない

派だったのだ。

駄目だ駄目だと言いながら、無理矢理にうさぎを引き離しはせず受け入れてしまった時点で、俺も完全に変態なわけだが。

ともかくにも、それに比べてこれは純粹に破壊力が高すぎる。ルミの肩を掴んで股間から引き剥がした。

「だから、君はなんでそんなことを！」

「なんででしょうー？」

無表情のまま不思議そうに首を傾げる。くっ、人型も可愛い。

「俺に聞くな！」

（うさぎ獣人は性欲が強いと有名だが、こんな状態になるなんて聞いたことがないぞ！）

ルミはももぞもぞとシートから腕を出すと、俺の腰にしがみついていた。

「なんかここからいい匂いがするんですー。おいしそうで食べちゃいたい」

「食べ……っ」

草食獣人相手に、股間が一瞬ひゅんつとした。でも全然萎えない。困った。

「んー」

「やめなさい！」

またも股間に顔を寄せつつ、ズボンを脱がそうとするルミを引き剥がし、ベッドの上に寝かしつけた。いや、そのつもりだったが、結果として押し倒してしまった。はだけたシートから豊かな胸がこぼれ、黒髪が枕に広がる。お互い少し息が荒くて、ほとんど服を着ていない。この状況はまずい。

しかし、俺は気づいてしまった。シートの隙間から立ち上る、発情したフェロモンの強い匂い。

（彼女が、俺に、発情している……？）

それは抗いがたいほど魅力的な考えだった。思わずごくりと喉を鳴らす。

（どうする、俺……！）

そうだ、了承、彼女の了承が必要だ。合意ならあり！ 成人同士だもの！ ルミは成人するかしないかくらいの年齢に見えるが、これだけのフェロモンが漂うのであれば、成人だと断言できる。

「ルミ……、その、熱を治めたいか？」

ずるい聞き方だと思う。ルミは小さく頷いた。

「どうにかしてくださいー」

もう、我慢の限界だった。

薄く開いた赤い唇に口づけて、舌を割り入れる。甘い蜜のような味がした。

「んっ……はあ……」

時折漏れる甘えたような声が耳に届き、ますます熱心に、深く彼女の口内を探る。

「んん、おいしいー」

ルミも俺の舌に舌を絡め、唾液を舐め取っている。擦れ合うところからぞくぞくとした気持ちよさが広がっていく。

彼女の身体中を確かめるようにまざぐると、さらに鼻にかかったような声を出して、脚を絡めてきた。シートが完全に剥がれ落ち、脚の間から濃厚な匂いが立ち込める。すぐにでもそこにむしゃぶりたいのを我慢して、そっと耳を撫でた。

「ひゃん!？」

落ち着かなげに動く耳を手のひらで撫でつけ、優しく指で揉む。驚いたように口を開けてぶるぶると震えながらこちらを見つめてくるが、なぜだろう。耳は、人によつては一番の性感帯だ。もしかして、触れられたことがなかったのか。

いやまさか。恋人がいればその程度の戯れは口づけと同程度にはする。こんなに魅力的な女性が未経験だなんて、ありえないだろう。フェロモンも素晴らしいが、顔立ちも体つきも……、きつと多くの男がルミを求めてきたはずだ。そう考えると、腹の中に

どす黒い感情が溜まるようで、俺は頭を振ってその考えを追いやった。

ルミがあまりに震えるものだから、耳から手を離して頬に口づける。そのまま首にもキスをして、そっと胸を揉んでみた。思いのほか弾力のあるそれは、すべすべして手触りがいい。そつとその頂にある赤い突起を撫でると、彼女の身体に力が入った。さらに何度か撫でてから、やんわりと摘む。

「んんんっ」

俺の脚が、ルミの両脚できつく挟み込まれた。敏感な反応に気を良くして、立ち上がったそれをくりくりと弄りながら、もう片方に唇を寄せた。舐め上げて、舌先で転がし、吸いつく。その度にルミは身体を震わせ、小さな嬌声を上げる。

「あつ、あつ、やつ、なにこれっ。んっ、なんか、お腹につ響く……!」

「さっきから、煽りすぎ、だ」

俺はもうかなり余裕がなくなっている。名残惜しく思いながら彼女の胸から離れ、少し性急かと思いつつも脚を広げさせた。

「ちよっ、やだっ、見ないで」

「さっき、獣型の時に一度見たから今更だ」

「じゅうけい……? あっ!」

思い出したのか、ルミはすでに上気していた頬をさらに赤らめて脚をばたつかせたが、その程度は俺にとっては抵抗にならない。

「ほら、熱を治めたいんだろう？」

脚を押さえてそう言うのと、攻撃が弱まって、ふいっと顔を背けられた。これは続行していいことだろう。そのはずだ。

今までになく胸を高鳴らせながら、太腿を撫で、その先にある秘所に指を伸ばす。ここからはすでに蜜が溢れて後ろまで垂れていて、甘い匂いを強く発している。そつと開くと、充血した赤い色が誘うように覗いた。自分の喉が鳴るのが、他人事のように聞こえた。

（これは……、なんて蠱惑的なんだ。くそっ！）

乱暴にしないよう気をつけつつも、熱い蜜壺にすぐさま舌を差し入れてしまう。貪るように舐め吸ると、蜂蜜のように濃厚な甘みを感じた。彼女が悲鳴のような嬌声を上げて仰け反る。それに構わずさらに舐め、次いで秘玉にも舌を伸ばした。

「やあああああー！」

先ほどから彼女はびくびくと身体を跳ねさせっぱなしだ。どんな顔をしているか見たり、彼女の腰を少しだけ持ち上げて見下ろすと、身体まで淡く赤く染め、肩で息を

していた。そして、先ほどまでの無表情ではなく、わずかに眉間にしわを寄せて余裕のなさそうな表情をしている。それは大変扇情的だったが、少し心配になって問いかけた。

「大丈夫か？ 気持ちよくなかったり……、するか？」

「ちよ、ちよっと、待って……」

荒い息を吐きながら、ルミは俺を見上げる。睨に溜まった涙がこぼれ落ちて、嗜虐心をくすぐられたが、一応待つ。

俺は待てができる狼だ。

しかし、手は無意識に彼女の胸を揉んでいた。

「んんっ、ま、待ってって言ったのに……」

「す、すまん」

「あの、ですね。気持ち、いいんだと、思いますけど、刺激が強すぎて、苦しい……、です」

「ん？ 慣れていないのか？ もしかして、はじめて……？」

ルミは目に涙を溜めて、小さく何度も頷いた。

……腰にきた。

実は先ほどから少しだけそんな気がしていたのだが、本人が認めるのを見たらぐっと

きた。俺は特に初物にこだわる性向ではなかったはずなのに。

とはいえ興奮した狼は、大はしやぎで新雪を踏み荒らすこともある。傷つけないよう気をつけなければならぬ。

「急ぐ気持ちを抑えて、頷く。」

「わ、わかった。できるだけ、ゆっくりする」

ルミもまた頷いた。少しほっとしたように見える。本当になんでこんな美人がはじめてなんだ。そして俺がはじめてでいいのか。まるでわからない。

疑問は横に置いてこの幸運に感謝すると、さつきよりさらにがちがちに勃ち上がったオレを必死にだめながら、改めて彼女の秘所に向き合った。先ほどより優しく、入り口からその周辺までを舐め、指で皮の上から秘玉を撫でる。小さな豆が赤く立ち上がると、今度は皮を剥いて舌先でつつくようにそっと刺激した。

「あつ、あう、んっ、あつ」

「気持ちいいか？」

ひっきりなしに可愛らしい嬌声が上がっているし、舐めても舐めても蜜が滴り落ちてくるから、聞くまでもないとは思うが、念のため確認だ。わざと言わせたいわけじゃない。断じてない。

「き、気持ちいいですー」

ルミは顔を両手で覆って、小さな声で答えた。なんとという破壊力だ。鼻血が出るかと思っただ。さつきから彼女の表情や仕草、言葉の一つ一つに、どうしようもないほど煽られている。

「痛かったら、言ってくれ」

ようやくそれだけ言うと、赤い宝石を大切に舐め上げながら、そっと蜜壺に指を差し入れた。

（熱くて、狭い……）

どろどろに溶けた肉壁に指がきつく包まれ、期待と興奮が高まって、思わず溜息を漏らしてしまった。ここにオレを挿れたら、きつと包まれる喜びと搾り取られるような快感を得られるだろう。

焦らないよう自分を戒めながら、慎重に指を進め、解すようにゆっくり動かす。はじめは身を固くしていたルミも、徐々に緊張を解いている。赤い尖りを舐め、胸を触り、時折キスもして、やがて二本目が入るようになった。

「あつ、ああつ……、んっ、気持ちいいっ」

少しずつ中の感覚がわかってきたのか、擦る場所によってはよさそうな反応をしはじ